

【指導案】 第37回

「しつかりした指導案をつくってよい授業をした」という願いは、まだ教員の多くが持っているだろう。教育実習の訪問指導に行っても、実習生の話す時間の長い授業は、子どもの頭が動いていなかったと指摘される。発問によって子どもたちが考え工夫し、教員の説明ではなく、子どもたち自身が教員の教えたかったこと（＝授業目標）にたどりつき、そして指導案での予想を超えていくような授業が、若い教員の間でも幅広く〈理想〉として共有されている。

「教職課程コアカリキュラム」で「授業設計」が主軸として強調されている今、一番大事なことは、授業後に、指導案の展開に即して、一度授業目標やねらいを括弧に入れて、まずは子どもたちの実際の様子を具体的につかむことである。それが、子ども主体の授業づくりのサイクル（回路）への確かな入口になる。

日生連では、実践記録を検討して学ぶスタイルが



主になつてはいるが、経験の浅い教員にとつては、指導案の検討の機会がないと、学んだことを自分の授業には活かすににくい。経験のある教員や研究者は、実践記録から頭の中で「指導案」を「復元」し、また次の「指導案」を「構想」しているが、その作業を共有する回路をつくることは課題だ。

文献①は、生徒の認識の価値欠落性と、文化財（教材）の所与性が、教師の教授を「適用の技術」に「形式化」「定型化」する危険性を示したが、文献②はその中で、オーフェルベルク、ディースターヴェータ、槇山英次らの「生徒から問が発せられるような」な「発問」への発問論の進化を指摘している。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① 稲垣忠彦「増補版 明治教授理論史研究―公教育教授定型の形成―」評論社、1995年（初版1966年）、440～442頁。
- ② 豊田久電「明治期発問論の研究―授業成立の原点を探る―」ミネルヴァ書房、1988年、41、173頁。